

コロナ禍におけるオンライン学習と学生生活 —— 和光大生を対象にした調査結果の分析

杉浦郁子 *SUGIURA Ikuko*

小野奈々 *ONO Nana*

米田幸弘 *YONEDA Yukihiro*

- 1 — 目的
- 2 — 調査結果
- 3 — 「授業満足度」「体調」「オンライン授業継続の賛否」を規定する要因
- 4 — 自由記述回答から：大学の今後の課題を考える
- 5 — おわりに

【要旨】本研究では、2020年9月に和光大学で実施した「オンライン授業と学生生活に関するアンケート」で得られたデータを分析し、今後の大学のあり方に関して若干の問題提起を行った。

第1章で調査の概要を述べたあと、第2章では、①通信状況と使用機器、②前期オンライン授業に対する評価、③後期オンライン授業継続の賛否とその理由、④生活の状況、⑤体調、⑥新型コロナウイルス感染に対する不安の6点について集計結果を示し、学生の学習や生活の状況を概観した。

第3章では、通信状況が悪い学生ほど、授業満足度が低く、心身の不調を深刻に自覚しており、オンライン授業の継続に否定的だったことを明らかにした。前期を通じてオンライン授業に必要な通信環境を準備できなかった背景に、経済的な事情がある可能性があり、オンライン授業では、不利な条件を抱えた学生に十分な学習機会を保障しにくいこと、経済格差が教育格差につながりやすいことを指摘した。

第4章では、自由記述回答の観察から、オンライン授業で困難が助長された学生／緩和された学生が可視化され、学習に困難を抱える学生から大学へなされる要望のありようが変わっていく可能性を指摘した。さらに、大学は今後、「新しい生活様式」によって価値観の変化を経験した学生と向き合うことになり、対面授業を重視するならば「共に在ること」に対する積極的な意味付けと、それに合致した授業運営が求められることを論じた。

1 — 目的

本研究は、2020年9月に和光大学で実施した「オンライン授業と学生生活に関するアンケート」で得られたデータを分析し、今後の大学のあり方に関して若干の問題提起を行うものである。

1-1 背景

和光大学では、新型コロナウイルス感染対策として、2020年度前期の授業をオンラインで実施した。後期も「原則15週オンライン」の方針のもと、11月現在、限られた実習、

演習以外のほとんどの授業がオンラインで行われている。キャンパスへの立ち入りも、申請による許可制がとられ、大きな制限を受けている。

「後期も原則 15 週をオンライン」という方針は、前期が終わりを迎えようとしていた 7 月 30 日に配信された。筆者らが所属する現代社会学科では、その頃から、後期の方針を知った学生、保証人からの相談が目立ち始め、ある保証人から次のような要望が届いた。

大学が前期中に行ったアンケートは、学生がオンライン学習をするさいの通信環境や使用機器しか確認していない。そうではなく、課題にかけている時間、パソコンに向かっていている時間、睡眠時間、心身の状況など、生活の実態を大学としてきちんと把握してほしい。

大学や学科には、様々な要望が届いていたが、この要望に応じるのは、社会調査の科目を擁する現代社会学科の仕事だと思われた。また、ある学生からは「同じ大学に通う他の学生の状況を知りたい」という要望が届き、調査結果の公表が、孤立と不安に直面する学生の一助になることを認識した。そこで、現代社会学科で初年次教育を担当している筆者らが中心となり、学科の学生を対象としたアンケートを作成した。

1-2 内容

本稿では、調査結果¹⁾を概観したあと(第2章)、「オンライン授業の満足度」「体調」「後期オンライン授業継続の賛否」の3項目に注目して、これらを規定した要因を検証する(第3章)。最後に、自由記述回答の観察から、大学の今後の課題について考える(第4章)。

筆者らは、人が集うことで生まれる創造性を売りにする大学が、「オンラインでできるから」と簡単に対面授業を手放したことを憂慮している。「学生や教職員が共に在ること」の価値が低く見積もられ、「人と一緒にいること」に対する抵抗感が気軽に表明されるようになったいま²⁾、オンライン学習という選択肢を知った学生たちがキャンパスにすんなり戻ってくれるのだろうか。このアンケートの結果から言えることは少ないが、対面授業再開に向けて大学が何を考えなければならないのかを第4章で論じたい。

1-3 調査の概要

現代社会学科と人間科学科(ともに和光大学現代人間学部)の合同調査³⁾として、「オンライン授業と学生生活に関するアンケート」を2020年9月14日(月)から9月26日(土)にかけて実施した。Google Formsを活用したインターネット調査であり、対象は現代社会学科と人間科学科(身体環境共生学科)の全学生である。アンケートの協力依頼は、大学が学生に配布しているメールアドレスを通して行った。また、学科の教員が担当する授業において、協力への呼びかけを行った。回収数は266名、回収率57パーセントだった。

表1は、回答者の学年、性別、学科の内訳である。

表1 回答者の内訳

	1年生			2年生			3年生			4年生			合計
	社会	人間	小計	社会	人間	小計	社会	身体	小計	社会	身体	小計	
女	17	4	21	18	8	26	20	7	27	8	2	10	84
男	34	28	62	33	20	53	28	9	37	14	9	23	175
どちらかにあてはまらない	3	3	6	1		1							7
合計			89			80			64			33	266

注) 表の「社会」は現代社会学科、「人間」は人間科学科、「身体」は身体環境共生学科。2年生が入学したさいに「身体環境共生学科」から「人間科学科」への名称変更がなされた。

1-4 調査の質問項目

アンケートの設問は、①通信状況と使用機器、②前期オンライン授業に対する評価、③後期オンライン授業継続の賛否とその理由、④生活の状況、⑤体調、⑥新型コロナウイルス感染に対する不安、の6点であった。

アンケートでは、生活の実態や心身の状態を把握することを主眼にしつつ、教員として気になっていたことを確認するための質問も加えた。もっとも気になっていたのは、「オンライン授業継続」という大学の方針を学生がどう捉えているのか、ということだった。個別に相談をしてくる学生は、オンライン学習に起因する不調を抱え、後期に通学の機会が少しでも増えることを望んでいた。ところが、Zoomで行っていた少人数ゼミで後期のゼミ運営についての希望を聞くと、「後期もオンラインがよい」と答える学生が意外に多かった。そこで、全体的な傾向を知りたいと思い、「オンライン授業継続の賛否」を問うことにした。

「感染に対する不安」という質問を設けたのは、学生の間で、不安の持ち方や程度に開きがあるように見えたためである。緊急事態宣言が解除された後(2020年5月25日)、学生たちは、外出の機会を少しずつ増やしているようだった。一方で、前期が終わる頃になっても、感染を恐れて引きこもっている学生がいた。しかし、前者のような不安の小さい学生が、必ずしも対面を希望しているわけでもなければ、後者のような不安の大きい学生が、必ずしもオンライン授業に上手く対応できているわけでもなかった。このような錯綜した事態を少しでも整理したいと考え、質問に加えた。

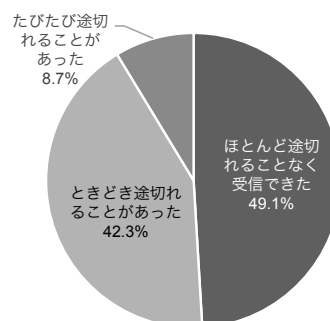
2 調査結果

2-1 2020年度前期の通信状況と使用機器

前期オンライン授業を受けたさいの通信状態について聞いたところ、「ほとんど途切れることなく受信できた」が49.1% (130人)、「ときどき途切れることがあった」42.3% (112人)、「たびたび途切れることがあった」8.7% (23人)であった(図1)。

「ほとんど途切れることがなかった」という

図1 インターネットの通信状況

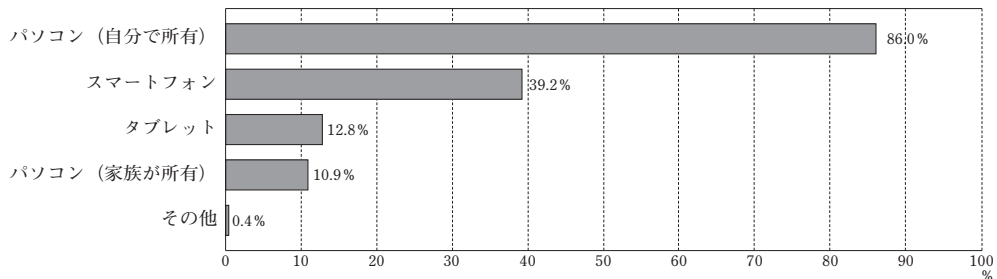


学生は5割に届かず、半数以上の者が快適な通信状況で受講できなかったことがわかった。

前期オンライン授業を受講するさいに使用していた機器について、複数回答で聞いたところ、「パソコン（自分で所有）」が86.0%（228人）、「スマートフォン」が39.2%（104人）、「タブレット」が12.8%（34人）、「パソコン（家族が所有）」が10.9%（29人）、「その他」が0.4%（1人）であった（図2）。

自分専用のパソコンを所有している者が大多数だったが、自宅にパソコンを所有せず、スマートフォンで受講していた学生⁴⁾も4.5%（12人）いた。

図2 受講時の使用機器



2-2 オンライン授業に対する評価

2-2-1 授業形態別の満足度

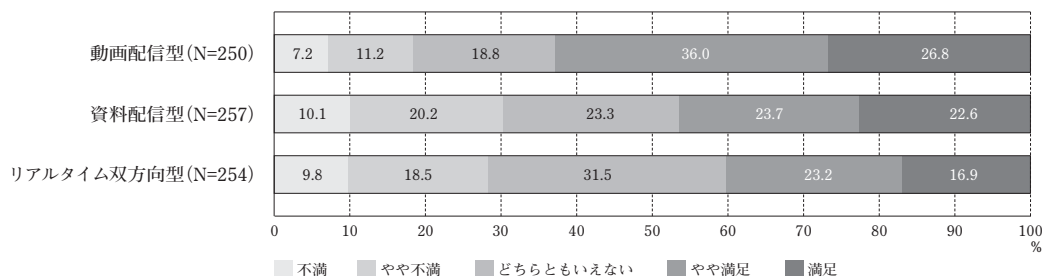
前期のオンライン授業の満足度について、授業の形態別に「不満」「やや不満」「どちらともいえない」「やや満足」「満足」の5段階で評価してもらった（図3）。

和光大学では、オンライン授業が「資料配信型」「動画配信型」「リアルタイム双方向型」の3形態に整理された。資料配信型は資料を配信する授業、動画配信型は映像や音声による解説を配信する授業、リアルタイム双方向型はZoom等を用いた授業だと大まかに理解されている⁵⁾。

3形態のうち、動画配信型は、「満足」「やや満足」と回答した割合がもっとも高く（62.8%）、「不満」「やや不満」と回答した割合がもっとも低かった（18.4%）。

資料配信型とリアルタイム双方向型を比べると、資料配信型のほうが「満足」「やや満足」の割合が高かった（資料配信型が46.3%、リアルタイム双方向型が40.1%）。リアルタイム双方向

図3 授業形態別の満足度



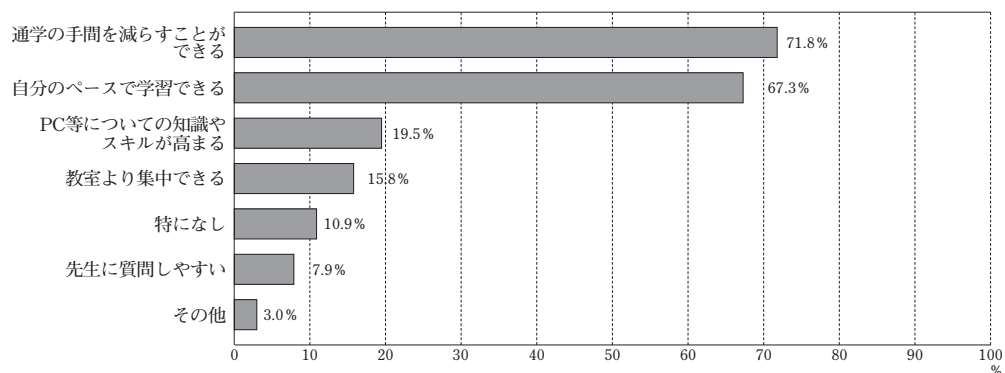
向型が不評だった理由に、授業への参加や集中が通信状況に影響を受けやすいことが考えられる。この点は、第3章(3-1-1)でくわしく述べる。

2-2-2 オンライン授業になって良かったこと

オンライン授業になって良かったことを複数回答で聞いたところ、「通学の手間を減らすことができる」71.8% (191人)、「自分のペースで学習できる」67.3% (179人)の2つに回答が集中していた。

その他の回答は2割を切っており、「コンピュータやオンラインツール (Zoomなど) について知識やスキルが高まる」が19.5% (52人)、「教室より集中できる」が15.8% (42人)、「特になし」が10.9% (29人)、「先生に質問しやすい」が7.9% (21人)、「その他」が3.0% (8人)と続いた (図4)。

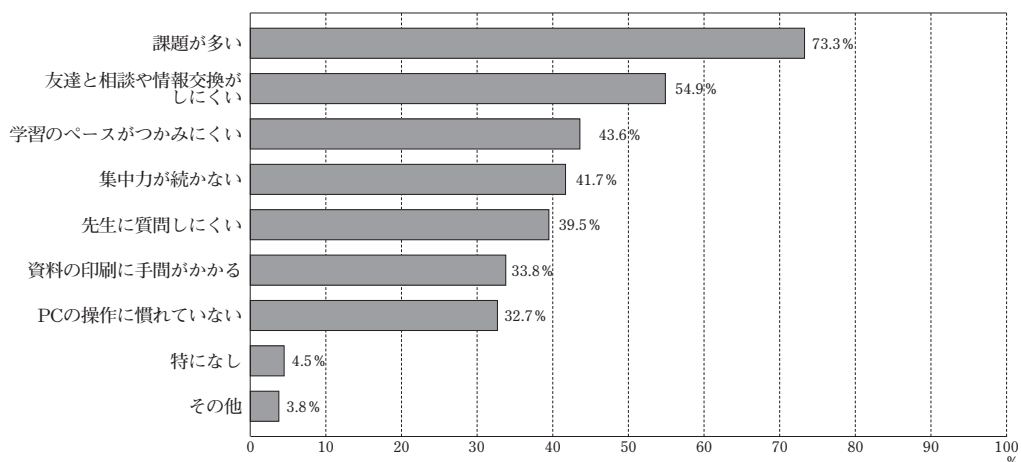
図4 オンライン授業になって良かったこと



2-2-3 オンライン授業で困ったこと

オンライン授業で困ったこと (図5) は、「課題が多い」が73.3% (195人)と突出していた。続いて多い順に、「友達と相談や情報交換がしにくい」54.9% (146人)、「学習のペースが

図5 オンライン授業で困ったこと

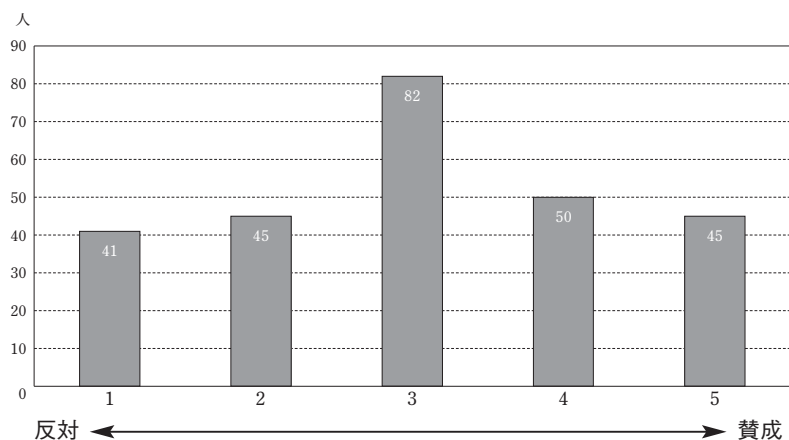


つかみにくい」43.6% (116人)、「集中力が続かない」41.7% (111人)、「先生に質問しにくい」39.5% (105人)、「資料の印刷に手間がかかる」33.8% (90人)、「PCの操作に慣れていない」32.7% (87人)、「特になし」4.5% (12人)、「その他」3.8% (10人)であった(図5)。

2-3 後期オンライン授業が継続されることについての賛否

後期にオンライン授業が継続されることについて、賛成か反対かを5段階で評価してもらった。図6では、横軸の「5」が継続にもっとも賛成しており、「1」がもっとも反対している。オンライン継続に肯定的な「5」「4」と回答したのは36.1% (95人)、中間の「3」と回答したのは31.2% (82人)、否定的な「2」「1」と回答したのは32.7% (86人)であり、意見が拮抗していた(図6)。

図6 後期オンライン授業継続の賛否



2-4 2020年度前期の生活状況

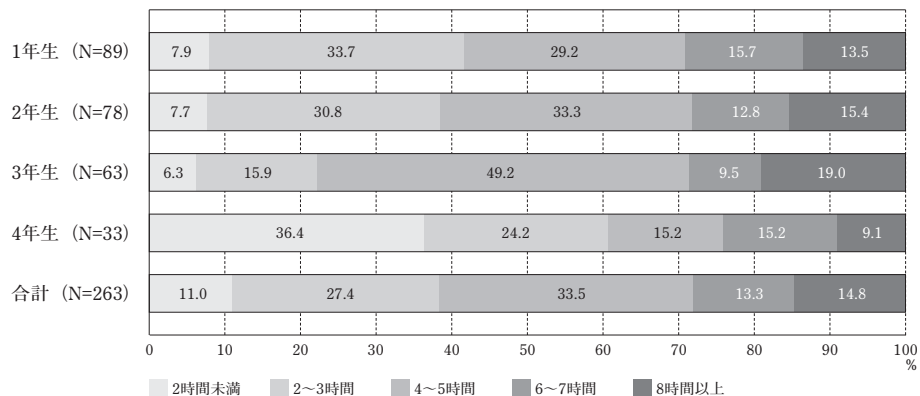
筆者らは、初年次教育を担当していたため、対面でのオリエンテーションもなく、友人との情報交換もできないまま、初めての履修登録やオンライン学習に懸命に取り組んでいた1年生の状況に、とくに関心を寄せていた。

本調査からは、学年間で統計的に有意な違いは見出されなかったものの、学年別の集計とともに傾向を示す。

2-4-1 平日の学習時間

前期の授業期間における平日(月～金)の学習時間の1日あたりの平均(授業を受ける時間や課題作成にかかる時間を含む)を聞いたところ、「2時間未満」が11.0% (29人)、「2～3時間」が27.4% (72人)、「4～5時間」が33.5% (88人)、「6～7時間」が13.3% (35人)、「8時間以上」が14.8% (39人)だった(図7)。

図7 平日の学習時間 (1日あたり)

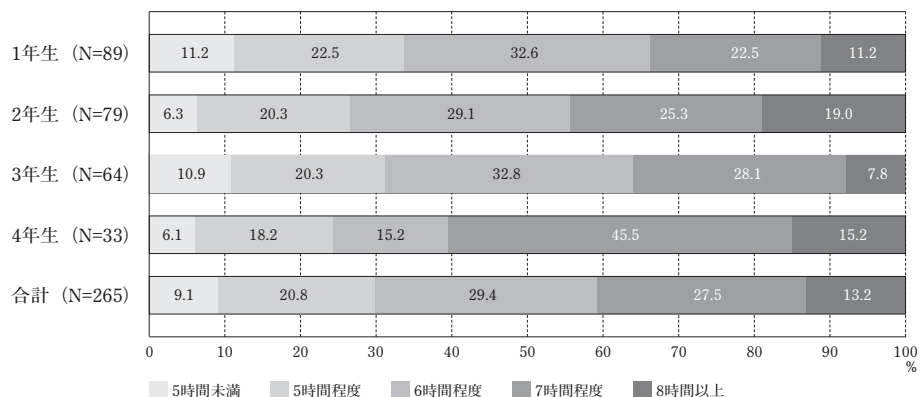


2-4-2 平日の睡眠時間

前期の授業期間における平日 (月~金) の睡眠時間の1日あたりの平均を聞いたところ、「5時間未満」が9.1% (24人)、「5時間程度」が20.8% (55人)、「6時間程度」が29.4% (78人)、「7時間程度」が27.5% (73人)、「8時間以上」が13.2% (35人) だった (図8)。

「5時間未満」「5時間程度」など、睡眠時間の少ない学生が約3割いた。

図8 平日の睡眠時間 (1日あたり)

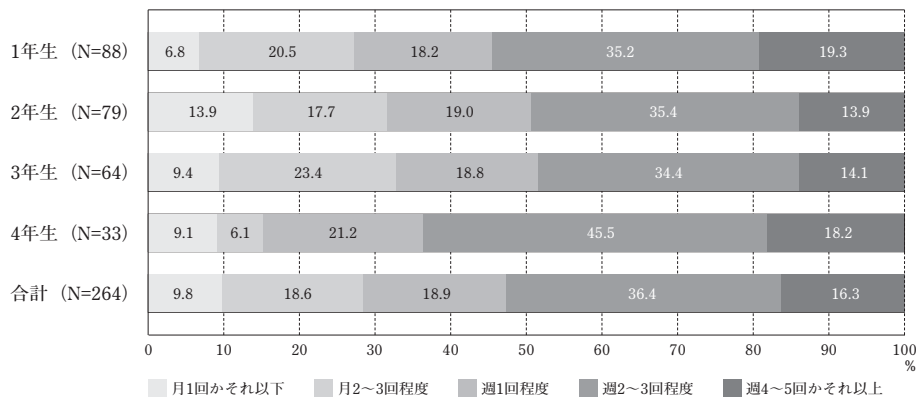


2-4-3 外出頻度

前期の授業期間中の外出頻度を聞いたところ、「月1回かそれ以下」が9.8% (26人)、「月2～3回程度」が18.6% (49人)、「週1回程度」が18.9% (50人)、「週2～3回程度」が36.4% (96人)、「週4～5回かそれ以上」が16.3% (43人) だった (図9)。

「月1回かそれ以下」「月2～3回程度」「週1回程度」を合わせると47.3%に上り、約半数が自宅で多くの時間を過ごしていたことがわかった。

図9 外出頻度

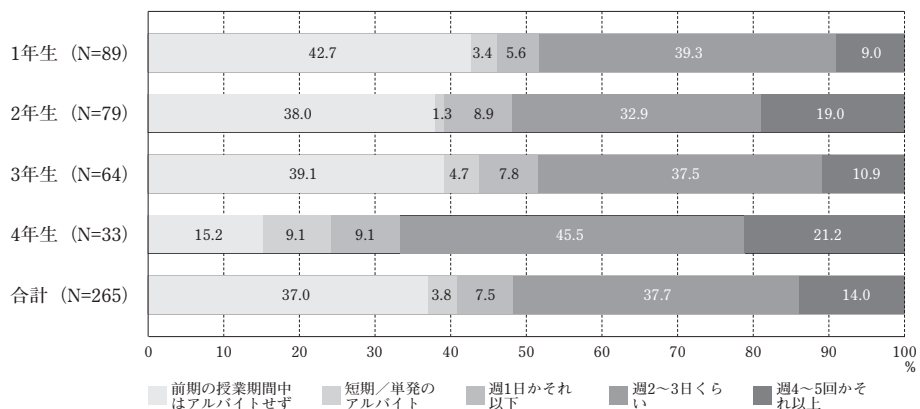


2-4-4 アルバイトの頻度

前期の授業期間中にアルバイトをどのくらいしていたのかを聞いたところ、「前期の授業期間中はアルバイトせず」が37.0% (98人)、「短期/単発のアルバイトのみ」が3.8% (10人)、「週1回かそれ以下」が7.5% (20人)、「週2～3回くらい」が37.7% (100人)、「週4～5回かそれ以上」が14.0% (37人) だった (図10)。

1年生においても、5割弱が「週2～3日くらい」「週4～5日かそれ以上」と回答しておりコンスタントにアルバイトをしていたことがわかった。

図10 アルバイトの頻度

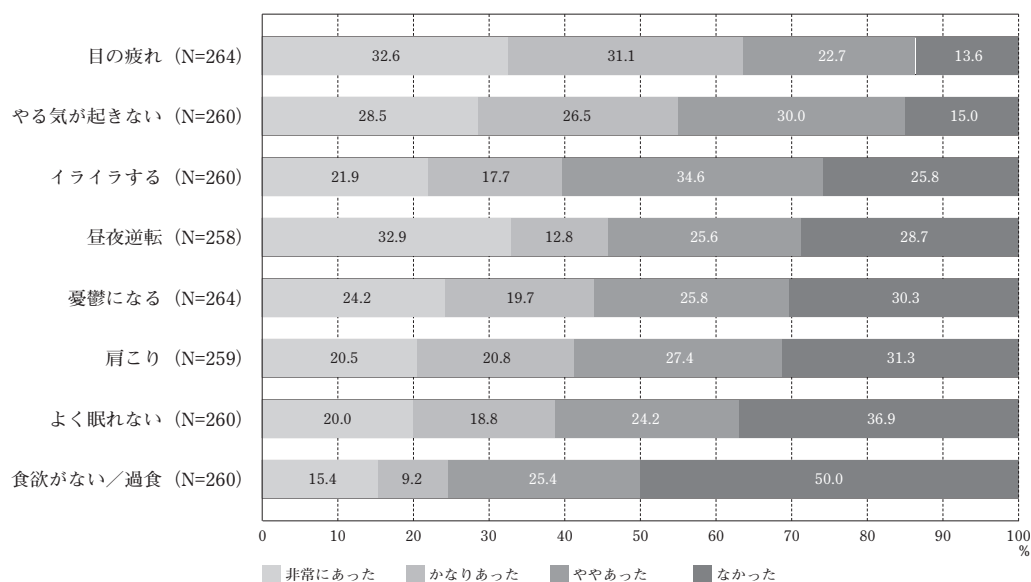


2-5 体調

前期の授業期間中の体調について、自覚症状がどれくらい強くあったかを聞いた。図 11 では、「非常にあった」「かなりあった」「ややあった」を足した割合が多い順に並べてある。「目の疲れ」がもっとも多く、「やる気が起きない」「イライラする」「昼夜逆転」「憂鬱になる」「肩こり」「よく眠れない」「食欲がない／過食」と続いた。もっとも自覚症状の少ない食行動でも、約半数が問題経験を報告している。

「非常にあった」がもっとも多かったのは、「昼夜逆転」である。これを「体調」の指標とするのは必ずしも適切でないが、対面授業が再開したときに、スムーズに適応しづらい層だと思われる。「昼夜逆転」は、「非常にあった」が 32.9% (85 人)、「かなりあった」が 12.8% (33 人) であった。

図 11 体調



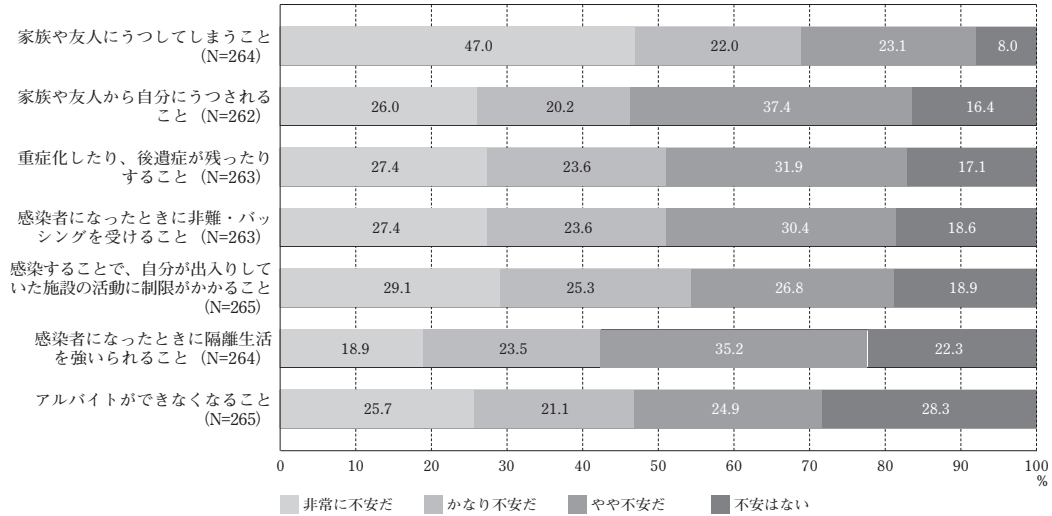
2-6 新型コロナウイルス感染に対する不安

新型コロナウイルス感染に対して、どのような不安をどのくらいもっているかを聞いた。図 12 は、「非常に不安」「かなり不安」「やや不安」を足した割合が多い順に並べてある。「家族や友人にうつしてしまうこと」「家族や友人から自分にうつされること」「重症化したり、後遺症が残ったりすること」「感染者になったときに非難・バッシングを受けること」「感染することで、自分が出入りしていた施設の活動に制限がかかること」「感染者になったときに隔離生活を強いられること」「アルバイトができなくなること」と続いた。

結果から明確に見えたのは、「家族や友人にうつしてしまうこと」が「非常に不安」だという回答が突出していることだけだった (47.0%、124 人)。これは、首都圏における「第 2 波」期間中に「無症状の若者が感染を広げている」という言説が流通したことと関係して

いるのではないかと推測しているが、学生たちは自分が無症状キャリアである可能性を意識している、とも解釈できる。学生らのこうした自覚は、集団感染を恐れる大学が、学生に対してもっとも期待していることだと思われる。

図12 感染不安



3——「授業満足度」「体調」「オンライン授業継続の賛否」を規定する要因

本章では、「オンライン授業の満足度」「体調」「後期オンライン授業継続の賛否」の3点に注目して、これらを規定するものが何であったのかを明らかにする。これらを規定する要因は多岐にわたることが予想されたため、因果関係を想定できるいくつかの変数に着目して一元配置の分散分析を行ったところ、通信状況や生活状況の違いが「授業満足度」「体調」「オンライン継続への賛否」に影響を与えていたことがわかった。なお、多変量解析による厳密な検証は今後の課題である。

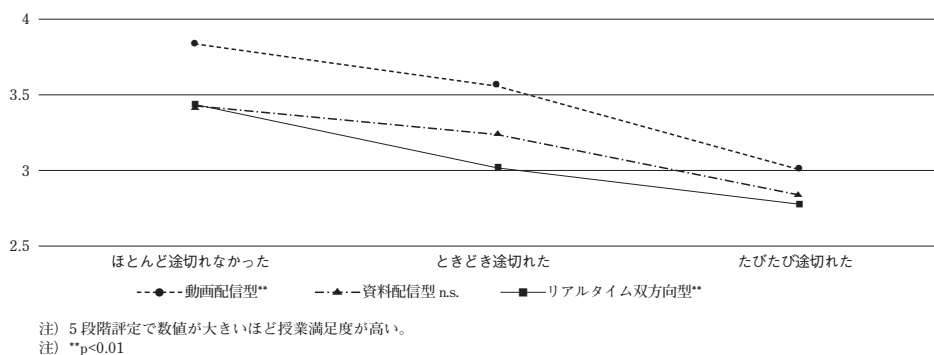
3-1 オンライン授業の満足度

3-1-1 通信状況との関係

オンライン授業では、インターネットの安定性によって受講しやすさが異なると予想し、通信状況による授業満足度の差異を検証した。

どの授業形態においても授業満足度は、「ほとんど途切れなかった」で高く、「たびたび途切れた」で低かった。ただし、資料配信型では、通信状況による有意な差が認められなかった(図13)。

図13 授業満足度の平均値(通信環境 × 授業形態別)



3-1-2 使用機器との関係

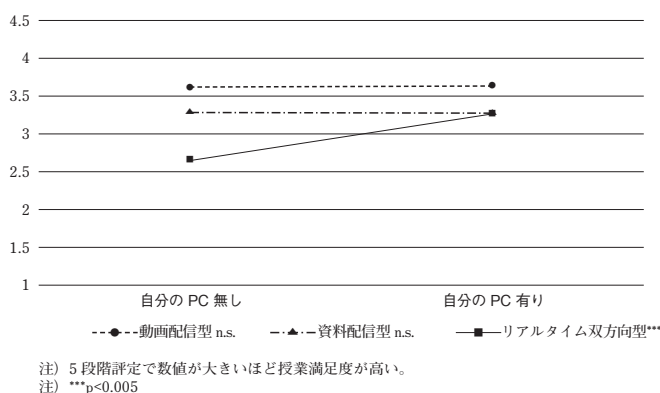
次に、使用機器の違いによる授業満足度の差異を検証した。

(1) 自分専用パソコンの有無

自分専用のパソコンで受講したかどうかでは、リアルタイム双方向型の授業満足度の平均値だけに差がみられた (図14)。自分専用のパソコンを持たない層で、リアルタイム双方向型の授業満足度が有意に低かった。つまり、リアルタイム双方向型では、使用機器の充実度の差がそのまま授業満足度に反映される傾向がみられた。

なお、「自分のPC無し」の該当サンプルは37人、リアルタイム双方向型の回答者では35人だった。ここには、家族が所有するパソコンを利用できているケースを含んでいる。

図14 授業満足度の平均値(自分のPC所有 × 授業形態別)



(2) スマートフォンの使用

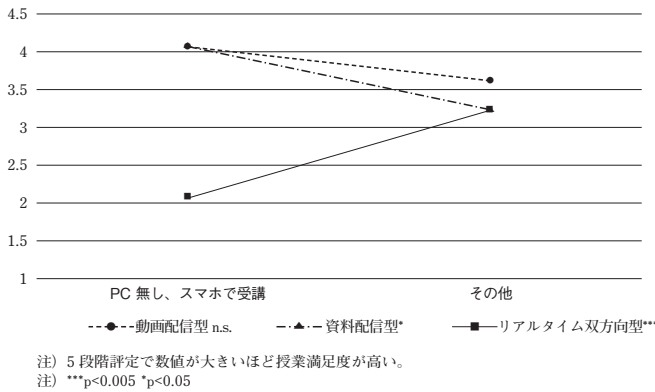
自分専用のパソコンを持たず、スマートフォンを使って受講した学生の授業満足度に注目したのが図15である。図の中の「PC無し、スマホで受講」は、自己所有のパソコンだけでなく、家族所有のパソコンも使用せずに、スマートフォンを授業で使用していることを意味する。「PC無し、スマホで受講」の該当サンプルは12人 (リアルタイム双方向型の回

答者では11人) だった。

パソコンを持たずスマートフォンで受講している学生は、リアルタイム双方向型の満足度が有意に低くなっている。リアルタイム双方向型の授業は、学生の使用機器による受講環境の格差が、そのまま満足度に反映してしまう傾向がある。

また、スマートフォンで受講している学生のほうが、それ以外の学生と比べ、資料配信型の満足度が有意に高くなっている。学生の間で不評とされる資料配信型の授業だが⁶⁾、自宅でパソコンが使えない層にとって、利用機器による制約をあまり感じないで済んだ可能性が高い。

図15 授業満足度の平均値(PC無しスマホで受講 × 授業タイプ別)

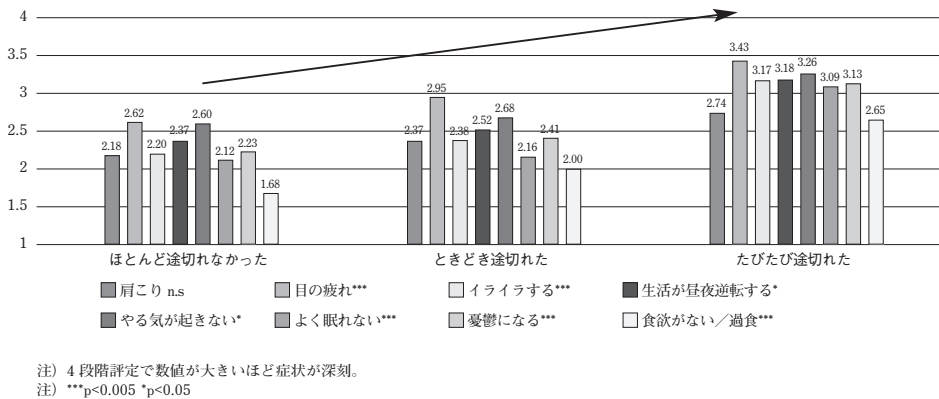


3-2 体調と通信状況の関係

次に、通信状況による体調の差異を分析した。

「肩こり」「目の疲れ」「イライラする」「生活が昼夜逆転する」「やる気が起きない」「よく眠れない」「憂鬱になる」「食欲がない／過食」の症状のうち、「肩こり」以外は、通信状況が悪い学生ほど、有意に深刻さを訴えた(図16)。通信状況が悪い中でオンライン学習をしていることと心身への悪影響との関係がうかがわれた。

図16 体調不良の平均値(通信状況×症状別)

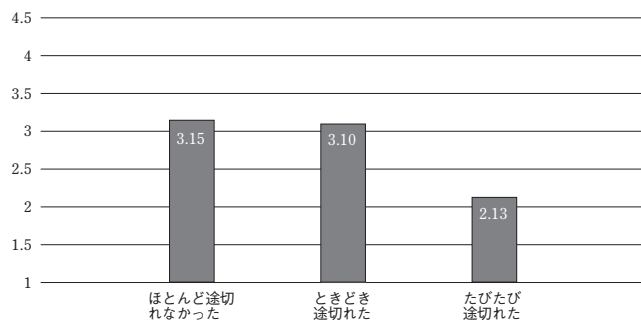


3-3 オンライン授業継続の賛否

3-3-1 通信状況との関係

インターネットの通信状況によるオンライン授業継続の賛否の差異を分析したところ、「たびたび途切れた」と回答した学生は、「ほとんど途切れなかった」「ときどき途切れた」と回答した学生とくらべて、オンライン授業の継続に否定的だった(図17)。

図17 オンライン授業継続への賛否の平均値(通信状況別)

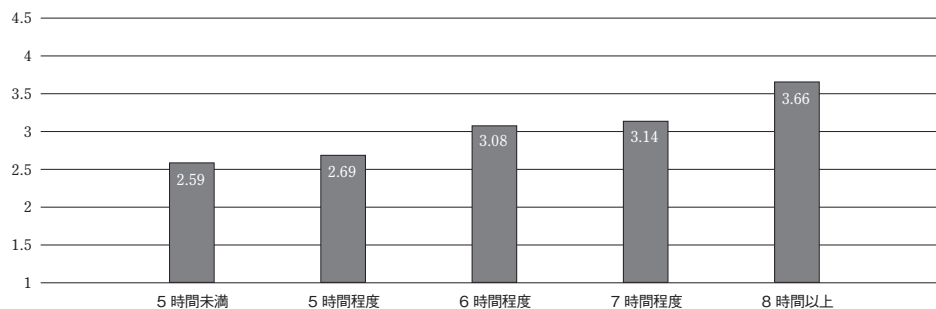


注) 5段階評定で数値が大きいほど、後期オンライン授業の継続に賛成。
注) 有意水準は*** $p < 0.005$ だった。

3-3-2 睡眠時間との関係

睡眠時間によるオンライン授業継続への賛否の差異を検証したところ、睡眠時間が短い学生ほど、オンライン授業の継続に否定的だった(図18)。

図18 オンライン授業継続への賛否の平均値(睡眠時間別)



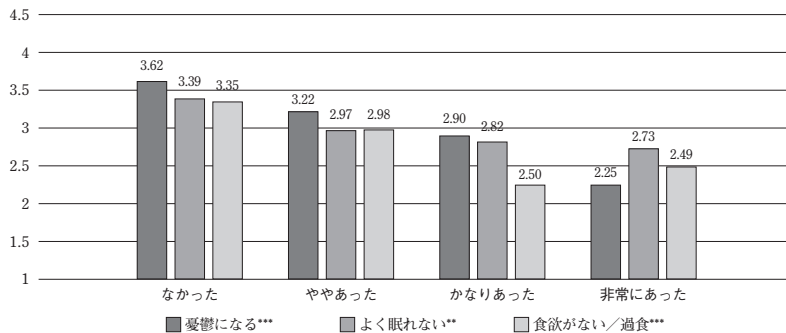
注) 5段階評定で数値が大きいほど、後期オンライン授業の継続に賛成。
注) 有意水準は*** $p < 0.005$ だった。

3-3-3 体調との関係

不調の症状別にオンライン授業継続への賛否を検証した結果、「憂鬱になる」「よく眠れない」「食欲がない／過食」に統計的に有意な差がみられた。これらの症状が強く出ている学生ほど、オンライン授業の継続に否定的だった（図19）。

抑うつ症状に加え、睡眠障害、食欲の減退などの体の不調は、うつ患者によくみられる症状である。抑うつ傾向にある学生ほど、オンライン授業をより負担に感じていることがうかがえた。

図19 オンライン授業継続への賛否の平均値（症状別）



注) 5段階評定で数値が大きいほど、後期オンライン授業の継続に賛成。

注) ***p<0.005 **p<0.01

3-4 「通信状況の悪さ」が意味するもの

本章の分析から、授業満足度、体調、オンライン授業継続の賛否と、通信状況（インターネット接続の安定性）の関係が明らかになった。通信状況が悪い学生ほど、授業満足度が低く、心身の不調を深刻に自覚しており、オンライン授業の継続に否定的だった。

本調査では、約半数が快適な通信環境のもとで授業を受けていたことがわかったが、「たびたび途切れた」と回答した学生も8.7%（23人）いた。また、少数ではあるが、パソコンが無いためスマートフォンで受講し続けた学生も4.5%（12人）いた。

ここで考えなければならないのは、前期を通じてオンライン授業に必要な通信環境を準備できなかった背景に、経済的な事情がある可能性である。心身の不調を訴えていたのも、通信状況が悪い層であった。学習環境の悪さが心身の不調につながったことも十分に考えられるが、家庭環境や経済的な事情が原因で、以前から抑うつ傾向があった可能性もある。

オンライン授業による不利益は、特定の層——経済的に不利な状況にある学生——により大きく生じたと思われる。オンライン授業のもっとも重要な課題は、不利な条件を抱えた学生に十分な学習機会を保障しにくいこと、経済格差が教育格差につながりやすいことにあるだろう。

4——自由記述回答から：大学の今後の課題を考える

本調査では、「前期のオンライン授業で、困った／良かった授業のやり方や方針」「オンライン授業継続の賛否の理由」「現在の大学生活について思うこと」について、自由記述で答えてもらった。本章では、自由記述回答を紹介し、教育機関としての大学の課題を明らかにするという観点から、若干の考察を加えたい。

4-1 オンライン授業で困難が助長された学生、緩和された学生

自由記述回答からは、授業がオンラインになったことで、対面授業での困難が助長されたケースと緩和されたケースが見えてきた。

対面授業での困難がオンライン授業により助長されたのは、聴覚に障害のある学生である。「自分自身、耳が聞こえない。オンライン授業は言葉が文字化できないので、前より成績が下がり、先生に聞こうと思っても課題が毎日出されて聞く暇もない。わからないまま前期が終わってしまって、どうすればいいのかわからない。字幕化の導入をお願いしたい」「ノートテイクなどがなかったため、友達に情報保障を頼ることが多かった」という回答が寄せられた。

聴覚障害のある学生にとって、動画配信型、リアルタイム双方向型の受講は、対面授業より情報の取得が難しかった様子が見てとれる。対面授業であれば、大学が提供するノートテイク・サービスを利用したり、友人のサポートを受けたりすることもできるが、オンライン授業ではそれもできなかった。音声を書き起こした文字情報がほしい、という学生の要望に応じられた教員もいたが、応じられなかった教員もいた。こうした状況を問題視して、和光大学は「UD トーク」(音声認識アプリ)を正式導入し、現在、UD トークを利用した新たな情報保障の方法の確立を目指している。

なお、視覚障害のある学生の回答は見受けられなかったが、かれらには、資料配信型の授業で情報保障が必要となる。Word や PDF のリーダーにテキストを読み上げる機能が装備されるようになっているため、視覚障害のある学生は、これらの機能を活用して何とか自学できたかもしれない。また、オンライン授業のために作成された資料や動画は、今後、視覚障害のある学生に提供可能である。今回、多くの教員が情報保障のための選択肢を増やしたと思われる。

オンライン授業により対面授業で感じていた困難が緩和された、という声もあった。以下に紹介する。

あがり症なので自分の顔を見られずにオンラインで発言できることは、僕にとっては少しは楽になった。しかしそれでも大人数が自分を見ていると上手く話せないで、後期のオンライン授業で少しずつ治していきたいと思えました。

わたしはロングスリーパーで常に眠く、醜形恐怖症もあるので、いつ受けてもいい動画配信型がいちばん集中もできて、やりやすかったです。スライド 30 枚以上ある資料を読むことはもちろん苦痛でしたが、それに比べると顔を出さないといけない Zoom などよりはよっぽどマシでした。

今回、配信型授業になったことにより、対面授業のときよりも大変学習がしやすかったです。私は発達障害があり、決まった時間に学校に行くこと、集中し続けること、大勢の人がいる中で集中することが苦手です。また、板書が苦手です。耳からの情報より目で見たとの方が理解できるので、板書のない資料配信型は大変助かりました。コロナ前の対面授業の時には授業をさぼりがちで、正直退学も考えていましたが、自分のペースで学習できる配信授業では、格段に成績もよくなり、自分の学力に自信を持つことができました。来年の春以降は通学授業になるのかと思うと、今から心配でたまりません。卒業までずっと資料配信か動画配信授業がいいです。もしくは対面授業と配信授業が選択できるようにしてほしいです。

このような、対面授業への参加に困難を抱える学生の問題は、これまで、個人的に解決すべきものと認識されてきたように思われる。しかし、今後は、大学が対応できる／すべき問題として、認識の転換が図られるかもしれない。

4-2 オンライン授業継続に対する意見

4-2-1 オンライン授業継続の賛否の理由に見る学生の 4 類型

後期もオンライン授業が継続されることについて、反対ないし賛成の理由を自由回答で聞いた。「2-3」で示したとおり、後期オンライン授業継続に対する意見は、否定的な回答、中間的な回答、肯定的な回答がそれぞれ 3 分の 1 ずつで拮抗していた。

賛否の具体的な理由を読んでいくと、学生のタイプを 4 つに分類できるように思われた。そこで、横軸に「オンライン授業継続に対する賛否」をとり、縦軸に「オンライン授業への適性」をとり、図 20 を作成した。

図 20 の第 I 象限は、オンライン授業に適性があるため、継続に賛成という学生である。第 II 象限は、オンライン授業にそれなりに適応できているが、対面の授業や交流が必要と考えている学生である。第 III 象限は、オンライン授業にうまく適応できないため、反対という学生である。第 IV 象限は、通学の手間や感染不安があるため、オンライン授業継続に賛成しているが、オンライン授業に上手く対応できているのかわからない学生である。

第 I 象限（オンライン授業に適性があるため、継続に賛成）は、たとえば以下のような理由が当てはまる。

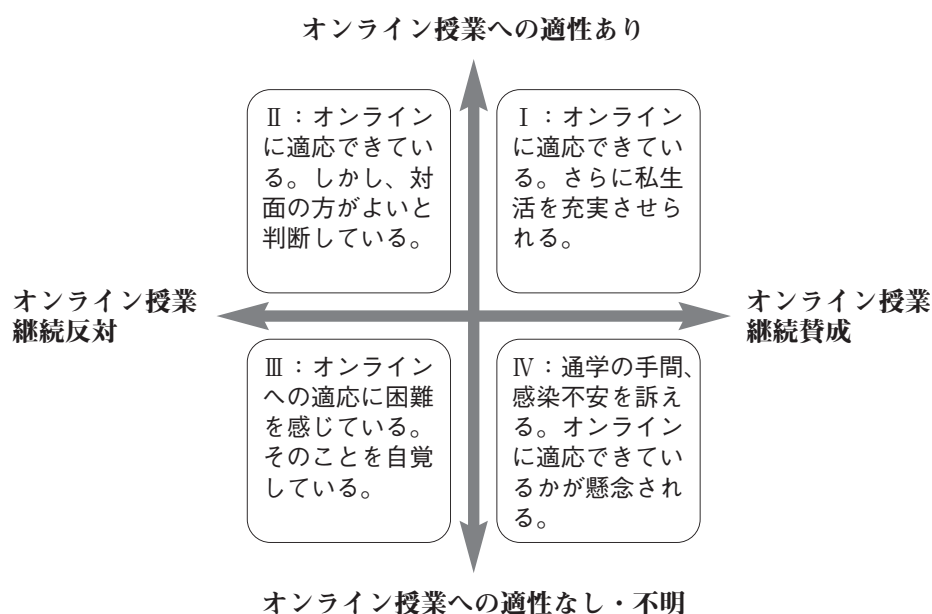
最初は友人ができないと後期のオンライン授業をネガティブに考えていたが、オンライン授業のおかげで片道1時間40分ぐらいかかる通学時間がなく体力が残っていて、その分興味のある本や他のことに時間がさけるのは嬉しい。また、後期になってやりたいことが増えたので、オンライン授業のあまった時間を活用できるのはよい。大学の教授に会えないのは寂しいがQ&A（筆者注：学習管理システム）で答えてもらえるし、プロゼミの月1ぐらいで大学に行けるし、友人は高校の友人がいるので、あらためて考えるとさほど問題はない。コロナウイルスは感染してもしょうがないものだと思うている。

自分のペースで学習が進むため、時間に囚われることなく発想を広げることができる。1つの教科で学習が終わるのではなく、いくつもの教科が繋がって学習できるため、たくさんの知識を取り込むことができるから。

時間・金銭的に通学の負担が減り、自分に合ったペースで学習を進められたから。自分の都合で日々のスケジュールを組めるため、アルバイトを続けることもできた。また、社会不安障害があることから、1人で勉強できたことは集中も高まり結果的に好成績につながったため、オンライン授業が継続されることはとても嬉しい。

資料配信型での授業を中心に履修すれば、バイトやボランティア活動をする時間が増え、自分がやりたいことにも専念できるようになるため。

図20 オンライン授業継続の賛否の理由に見る学生の4類型



第Ⅱ象限（オンライン授業に適応できているが、継続に反対）は、以下のような理由が当てはまる。

オンラインだと対面で会うよりコミュニケーションが難しいことがわかりました。おそらく教授各々も生徒の学習進捗を正確に測るのが難しいのではないかと感じます。そして、毎回出される課題が全ての講義にあるとなると、量も多くなるので、日常との差別化が難しいと考えたからです。

私は、対面授業が好きです。対面では、先生方の醸し出される雰囲気、内容や空気、授業のポイントなどが良く解る瞬間があります。疑問に思ったとき、手をあげて質問できなくても、終了後に質問したりもでき、獲得できることはたくさんあります。コロナで残念です。ほかの学生との交流がまったくなくなり、意見交換などができなくなるので困ります。図書館を利用したいという希望があります。

私は大学に直接行って、他者と交流しながら生活し、自分の生き方を考えるために、この大学に来た。家で1人でやるだけでは、世界は見えにくくなる。

課題をやるために授業を受けているような感じになり、何で大学にいるのか分からないです。同じ志を持っている友達とも話す時間がなく、自己を高めることもできなくなっている気がします。

第Ⅲ象限（オンライン授業にうまく適応できないため、継続に反対）は、以下のような理由が当てはまる。

ずっとパソコンの画面を見て同じ体勢を維持するため、終わったあとの疲労感が対面授業と比べてとても大きい。また、ブルーライトを浴びている影響のためか余計に疲れる。家で受けるので、場の緊張感がなく内容があまり身に入らない。また、身に入った実感もあまり湧かない。突然の虚無感に襲われる。

家でいつでも学習できるという環境でまともに授業を受ける気にならない。集中できない。昼間起きられず、結局夜に課題をやることが多く、昼夜逆転生活になってしまふ。身体も動かす機会も減るから不調。メリハリのない生活で勉強する気にもならない。

ほんとに目が疲れます。気も疲れる。長くて細かい文章だけの資料3枚とか渡される

だけの授業は、自分には合わないと思うばかりです。でも、選んでるだけじゃ履修が埋まらないし、単位も取れない…。

第Ⅳ象限は、「感染が不安」「通学の手間が省ける」などの理由でオンライン授業に賛成しているものの、学習の環境や意欲、体調に関する言及が少なく、オンライン授業にきちんと取り組んでいるのかわからない層である。たとえば、以下のような回答があてはまる。

学習のペースが掴みにくかったり交友関係が築けなかったり、というのはありますが、新型コロナウイルスのことを考えるとオンラインの方がいいのかと思っています。

コロナの感染拡大を防ぐためなら仕方がないと思ったから。

家を出る準備をせずに受講できる点と、交通費がかからないという面で、とてもいいと思うからです。

第Ⅱ象限の学生は、対面でのコミュニケーション、対話による創発の価値を重視するタイプである。これまで大学という教育機関が重視してきた価値や方法に合致する学生だと思われる。大学は、感染リスクを抑えるために「三密を避けた対面授業」を再開させているが、三密を避けたコミュニケーションが、このタイプの学生のニーズを満たせるのかが懸念される。

第Ⅲ象限の学生は、授業の課題に懸命に取り組んだことで、生活の乱れ、心身の不調、意欲の減退を経験している。オンライン授業に負担を感じているタイプであり、インターネット接続に問題を抱える層、抑うつ症状が出ている学生もここに含まれると考えられる。対面授業のニーズが高い学生たちである。

第Ⅰ象限の学生は、オンライン授業が自分に合っていること、登校しなくても学べる方法があることに気づき、オンライン授業に賛成している。このタイプの学生は、大学という教育機関のこれまでのあり方を批判的に検討し始めているかもしれない。

第Ⅳ象限の学生は、オンライン授業に賛成しているが、「新型コロナウイルスが怖いから」「個人的に登校するのが億劫だから」「たくさん眠れるから」などの短文の回答から、もともと通学に向いていなかった可能性がある。リスクを負って外出することに意味を見出しておらず、「通う」ということを強制されていたことに気づき始めているかもしれない。

オンライン授業を経験した学生たちは、複数の授業形態のメリットとデメリット、自分の特性やニーズを言語化し、大学で学ぶことの意味を考えるようになってきている。大学は今後、「新しい生活様式」によって価値観の変化を経験した学生と向き合うことになり、学生

から、大学がどんな教育理念にもとづいて、どんな学習機会を提供するのかを明確に問われるようになるだろう。対面授業に戻すことも、「パンデミック前に戻す」という理由では納得が得られないかもしれない。大学が対面での授業や交流を重視するなら、「共に在ること」に対する積極的な意味付けと、それに合致した授業運営が求められると思われる。

4-2-2 感染に対する不安

オンライン授業継続賛否の理由の回答において、「コロナ」への言及はそこまで多くなかった。「賛否の理由」の自由記述回答は214件あり、そのうちオンライン授業継続に否定的な回答の理由を述べたものが75件、中間的な回答の理由を述べたものが60件、肯定的な回答の理由を述べたものが79件であった。

オンライン授業に否定的な回答をした理由の内訳をみると、2件のみ(75件中)が「コロナ」に言及していた。「コロナを気にしてたくないし、生活リズムが狂うから」「新型コロナの感染対策という事情は理解できるが、前期のオンライン授業による環境の変化に対応できずに調子を崩してしまったため」というものだった。

オンライン授業に肯定的ないし中間的な回答をした理由において、新型コロナウイルスの流行や感染の不安に言及しているものは、45件(139件中)であり、3割強にとどまった。さらにその内容をみていくと、感染不安に言及していても、それをオンライン授業継続を肯定・受容する直接的な理由にしていなかった回答も散見された。「交通費がかからないため。また、コロナとあわせて冬にかけてインフルエンザも増えてくる時期に登校するのは不安なため」「オンラインの方が自分に向いているしコロナで大学に行きたくないため」(下線は筆者)といった回答がその例である。

ふりかえると、「2-6 新型コロナウイルス感染に対する不安」で確認したとおり、学生の中に感染に不安をもっている者は相当程度いたはずである。だが、以上の自由記述の結果を踏まえれば、感染に不安があることと、オンライン授業継続を支持することとは、学生の中で別の問題として捉えられていた可能性がある。統計的にみても、「2-3 後期オンライン授業が継続されることについての賛否」と「2-6 新型コロナウイルス感染に対する不安」の感染不安の質問項目群との間にはいずれも有意な相関がみられず、「感染不安が強いほどオンライン授業の継続を望む」という傾向は確認できなかった。

つまり、学生たちは、オンライン授業の継続の賛否について自分の意見を形成するさいに、「コロナ」以外の様々な枠組みを参照していたといえそうである⁷⁾。

したがって、「集団感染が心配だからオンライン授業を続ける」という大学の説明の仕方は、学生の理解を得にくくなっていると思われる。学生たちの多くは、感染の不安以外の理由で、言い換えれば、感染リスクをある程度引き受けることを前提としたうえで、オンラインないし対面授業への態度を表明している。

5 — おわりに

最後に、「現在の大学生活について思うこと」に寄せられた回答を紹介したい。

このような生活が長く続くのは正直つらい。また学費が大きいのしかかっている。同じ学費を払っているのに、施設は使えず、ひたすら課題をこなす流れ作業のようになってしまった。同じ学費を払っているが、教育の質の低下は間違いなくあったと思う。せめて教育費減額をしてほしい。大学の財政的に苦しいのは知っている。では、国に大学としても要請してほしい。

同じような大学生からの悲鳴は、既存のメディアでも取り上げられてきた。キャンパスの出入りを制限され、オンライン学習を続ける学生たちは、大学の決定やそれに影響を与える政府の権力を肌で感じているのではないだろうか。「大学生が割を食っている」という意識が大学生の政治や社会への関心をうながしたのだとすれば、そうした学生に対峙する大学も変わらざるを得ない。大学には、学生との対話がこれまで以上に求められている。

《注》

- 1) アンケートの結果は、自由回答も含めて公開した。

<https://1drv.ms/b/s!AszCEllsTBQmhZ1-JWdc-H3BAXR1QA?e=lacXhi> より閲覧できる。

- 2) 「コロナ禍を考える (中) 伊藤亜紗×東浩紀」『東京新聞』2020年8月12日夕刊。

- 3) 現代社会学科の教員の多くは、2021年度より人間科学科へ移籍することが決まっている。学生の傾向やニーズについて学科間の違いを把握することは、次年度以降の学科運営にとって有益であると考え、人間科学科の学生にも調査に参加してもらった。

学科間の比較をしたところ、リアルタイム双方向型と動画配信型の授業満足度の平均値に有意な差がみられ、いずれも人間科学科のほうが満足度が低かった。また、後期オンライン授業継続の賛否も、平均値の比較において有意な差がみられ、人間科学科のほうがオンライン授業継続により否定的な傾向があった。このような学科による違いがどこから生じるのかは、今回の調査データからは明らかにならなかった。今後の課題としたい。

- 4) 「自分所有のパソコンを使っていない」かつ「スマートフォンを使っている」者。

- 5) 和光大学では、2020年度前期は、学生の受信量を抑制するため「資料配信型」が推奨された。

- 6) 麗澤大学が実施した「オンライン授業に関するアンケート」(2020年6月10日～14日、回答者数1016人、回答率35.3%)によると、「Zoomを用いたリアルタイム型授業」に「満足している」「まあまあ満足している」が合わせて76.2%、「音声や映像配信を用いたオンデマンド型授業」では66.6%、「資料提示型授業」では42.5%であり、資料配信型の評価がもっとも低いことが報告されていた。

- 7) 本調査が実施されたのは、後期もオンライン授業が継続されることが7月末に発表された後、夏休みを挟んで後期授業が始まった直後である。この調査の時期が、回答に何らかの影響を及ぼしたかどうかについては確かなことが言えない。感染不安がオンライン授業継続の賛否と関連していないのは、気候が温暖でコロナの感染拡大が比較的落ち着いていた時期の調査であることが影響してい

る可能性がある。

《参考文献》

麗澤大学 2020.6.23. 「オンライン授業に関するアンケート」

<https://www.reitaku-u.ac.jp/news/images2/2020/06/5c3ea42fa8b2d3f30d2ef7c10b9c253a.pdf> (参照 2020-10-31)

「コロナ禍を考える (中) 伊藤亜紗×東浩紀」『東京新聞』2020年8月12日夕刊

謝辞: アンケートに協力してくれた学生、予備調査に協力してくれた学生、アンケート協力を学生に呼びかけてくれた先生方に感謝いたします。今後の大学のあり方を考える機会を得ることができました。どうもありがとうございました。

_____ [すぎうら いくこ・和光大学現代人間学部現代社会学科教授]

_____ [おの なな・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授]

_____ [よねだ ゆきひろ・和光大学現代人間学部現代社会学科准教授]